

**京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書**

2019年 11月 12日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 藤 洋 作 様

所属部局・研究科 フィールド科学教育研究センター

職 名・学 年 特定研究員

氏 名 邊見 由美

助 成 の 種 類	2019年度 ・ 国際研究集会発表助成	
研 究 集 会 名	第4回アジア海洋生物シンポジウム / The Fourth Asia Marine Biology Symposium (AMBS2019)	
発 表 形 式	<input type="checkbox"/> 招 待 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 口 頭 ・ <input type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他(
発 表 題 目	甲殻類と魚類における共生関係 / Symbiotic relationships between crustaceans and fishes	
開 催 場 所	Howard Civil Service International House / The Center for Condensed Matter Sciences (CCMS) in National Taiwan University (NTU)	
渡 航 期 間	2019年 11月 3日 ～ 2019年 11月 7日	
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()	
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	100,000円
	使用した助成金額	100,000円
	返納すべき助成金額	0円
	助 成 金 の 使 途 内 訳	航空券代: 41,460円
		交通費等: 22,540円
宿泊費: 36,000円		
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 貴財団の助成により、国際研究集会に参加し、セッションのとりまとめと研究発表をすることができました。今回の発表助成に対して深く感謝いたします。 今後も助成事業を継続していただきたく思います。	

成果の概要

フィールド科学教育研究センター舞鶴水産実験所

特定研究員 邊見由美

【学会の概要】

学 会 名：第4回アジア海洋生物シンポジウム

(The Fourth Asia Marine Biology Symposium: AMBS2019)

開 催 地：台湾, 台北市

Howard Civil Service International House / National Taiwan University (NTU)

開催期間：2019年11月4日～2019年11月6日

2019年11月4日から6日に台湾で開催された第4回アジア海洋生物シンポジウム (The Fourth Asia Marine Biology Symposium: AMBS2019) に参加しました。AMBSは、約2年に一度開催されるアジアの海洋生物に関する学術集会で、創始者は熊本県立大学の堤裕昭先生、タイのカセサート大学の故 Chittima Aryuthaka 先生、韓国の仁川大学の Jae-Sang Hong 先生です。第1回は2012年にタイのプーケットで、第2回は2014年に韓国の済州島で、第3回は熊本県立大学で、とアジア各地で開催されてきました。今回は台湾での開催で、テーマごとのセッションに分けられ2会場で口頭発表、1会場でポスター発表が行われました。

【発表内容】

11月5日の午後には、セッション「甲殻類の共生と寄生：アジアにおける多様性と生態学的研究 (Symbiosis and Parasitism in Crustacea: Diversity and Ecological Studies in Asian Region)」のオーガナイザーをつとめました。下記にセッション中のプログラムを示します。

- 1) Introduction.
- 2) Benny K.K. Chan, Wang T-W, Lin H-C.; Are coral associated barnacles suspension feeders or they have to derive carbon from their coral hosts?
- 3) Ryutaro Goto; Diversity of bivalves symbiotic with crustaceans.
- 4) Meng-Chen Yu, Wong Y-H, Kolbasov G-A, Chen H-J, Wada N, Tang S-L, Chan B-k.k.; Windows for animals: Understanding the functions of the unique window structure in the shell of sponge-inhabiting barnacles.
- 5) Niklas Dreyers, Olesen J, Palero F, Grygier M, Machida R, Chan B-K; The biology and lifecycle of enigmatic crustacean y-larvae.
- 6) Sungtae Kim, Lee C-L, Hong J-S.; The effect of the isopod parasite, *Gyge ovalis* on the mud

shrimp, *Upogebia major* in the west coast of Korea.

- 7) Yumi Henmi, Itani G.; Symbiotic relationships between crustaceans and fishes.
- 8) Akira Asakura, Imazu M.; Species composition and seasonal abundance of ectoparasitic crustaceans on intertidal hermit crabs in the Pacific rocky shore of Japan.
- 9) Gyo Itani; Overviews and comments.
- 10) General discussions.

このセッションには約 50 名の参加者があり、活発な議論がおこなわれました。

私は、「甲殻類と魚類における共生関係 / Symbiotic relationships between crustaceans and fishes」として、発表を行いました。はじめに、Karplus (2014) "Symbiosis in Fishes"を取り上げ、掃除、摂餌、防衛、産卵、巣穴を介した魚類と甲殻類との様々な共生関係を紹介しました。特に、巣穴共生からは、アナジャコ類やテッポウエビ類の巣穴を利用するハゼ類について自身の研究内容を紹介しました。干潟域に生息するアナジャコ類の巣穴は、エビ類やカニ類、ハゼ類などが利用することが知られています。実験室内の水槽に巣穴を再現して共生者の巣穴利用を比較したところ、種によって巣穴利用時間が異なることが明らかになりました。これは、その食性が関連していると考えられました。テッポウエビ類の巣穴も、ハゼ類によって利用されます。特に、テッポウエビの巣穴にはツマグロスジハゼが条件的に共生することが知られています。メソコズム実験により、ハゼが共生する場合としない場合とで巣穴形態が異なることが明らかになりました。現在、巣穴構造の差について論文執筆中です。

総合討論では、「適応」に着目して、演者一人一人からコメントをいただきました。

【謝辞】

今回、第 4 回アジア海洋生物シンポジウム (The Fourth Asia Marine Biology Symposium: AMBS2019) への参加、セッションのオーガナイザーをつとめることは貴重な経験となりました。公益財団法人京都大学教育研究振興財団の国際研究集会発表助成に心より御礼申し上げます。また、今回のセッションは朝倉彰先生 (京都大学・瀬戸臨海) にオーガナイザーとしての機会をいただきました。伊谷行先生 (高知大学・黒潮圏) には、ともにセッションのオーガナイザーをつとめていただきました。さらに、セッション当日は Benny K. K. Chan 先生 (Academia Sinica) に研究室をご紹介いただきました。先生方、ならびに温かく支えてくださった演者のみなさまに感謝申し上げます。また、当セッションは日本甲殻類学会の後援を受けて開催されました。